

ホイボン村の生活体験と交流会

9月15日

ホームステイ先であるホイボン村の生活体験日とし、ホイボン村の人々と交流し、日常作業の見学を行った。夜には村の集会議場で交流会を行った。

講師：リンクスタッフ、ホイボン村のみなさん

キーワード：食事、散策、パフォーマンス、交流、別れ

村でむかえた二日目の朝、目が覚めると雨が家の屋根をうつ音が聞こえてきた。お世話になっている家族のみんなはもう起きているようで、私の寝ているベッドの置かれた部屋の壁越しに、だれかが歩いて床板のきしむ音や、お母さんかおばあさんが朝食をつくる音が聞こえてきた。生活音が目覚まし時計の代わりになっている。

朝食を食べ終わっても雨はいつこうに降りやまない。

お昼の時間になる。昼食の献立は、あっさり味とスパイスのきいたものの二種類のスープ、焼き魚、ピリ辛味の青菜、それに白いご飯。その場にいた家族全員が料理のもられた大皿を囲むようにして座り、いっしょに食べる。最初は辛すぎて箸のすすまなかった青菜も、辛さに慣れてくるととてもおいしく感じられてきてぱくぱく食べていると、それを見たお母さんがうれしそうにしながら、おかわりの皿をよそってくれる。

昼過ぎに雨が小降りになってきたので、お母さんが娘二人といっしょに村の見学に出かける。ほかのメンバーがお世話になっている家を訪ねると、家の入り口の前の軒下に5、6人の村の人たちが座っておしゃべりや手作業をしていて、その輪に加わらせてもらう。なかにひとりやんちゃな子がいて、輪の真ん中で跳んだり廻ったりしている。大人たちはそれを見て口々に批評し、囃したてる。たとえ小さな子どもでも、場を沸かせる立派なひとりのパフォーマーだ。

20時すこし前、昨日いっしょに遊んだ子どもがむかえにきてくれて、いっしょに村人との交流会が行われる会場へ。私が着いたときには閑散としていた会場も三々五々ひとが集まってきて、会が始まる頃には会場に入りきらないほどだった。日本人の側からは篠笛と唄のパフォーマンスをし、村人の側からはダンスが三組演じられた。村で過ごす最後の晩と考えると名残惜しかったとはいえ、たくさんの村人たちと交流することができた印象に残る一日だった。

(記録：楠和樹)